

第7回 作業療法ジャーナル研究助成・研究結果報告

「学齢期後半から青年期中期における、巧緻性の 高い協調運動の発達に関する調査」 研究結果報告



新井紀子氏

新井 紀子

(京都大学大学院、作業療法士)

私は、臨床で不器用さが背景にあると思われるものの、年齢制限のために適切な検査を行いきにくい事例を経験し、学齢期後半から青年期中期までが対象である、新しい簡易の協調運動評価が必要であると考えました。それには、検査として用いる項目の発達的变化の調査が必要です。そこで、このたびの研究助成を受け、調査を開始しました。

現在、①発達障害の協調運動障害の評価として信頼性・妥当性が高い、②検査施行時の身体的リスクが低い、③実施方法が簡便である、の3点から選定した7検査（JPN 感覚処理・行為機能検査の「コインをゲット!」、「おっと」と、「ぶたさんの顔」、「仲良くおひっこし」、「けがして大変」、Movement Assessment Battery

for Children-2 を参考にした立位バランス、Bruininks-Oseretsky Test of Motor Proficiency-2 を参考にした両側協調運動を、通常の学級に在籍する12～15歳の男女139名へ実施しました。各検査の粗点より年齢ごとにパーセンタイル値を求め、参照値として活用できるようにしました。

今後は、対象児数をさらに増やすこと、および11歳と16～18歳に対象年齢を拡大していくことが課題であり、これらの結果は随時、発表する予定です。

研究の一部は今後も続きますが、このたびの貴重な機会に感謝し、作業療法の発展に寄与できるよう、今後とも努力してまいります。